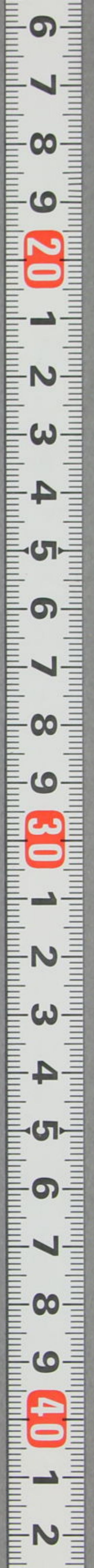




5
4417
1



門 5
4417
卷 1

序
余乃

酒人也左持觥右
舉酒盃無暇與學世
所謂
誹謗之詞雖然紙上有墨
者不得不瀏覽焉頃者觀

昭和九年
九月二十五日
購求

鈴道彥所撰爲本集言
句皆有風致以以悅人
之身自於是酒間或摘
其句以供於文字飲之
且每添豪興不覺醉
倒甕頭矣曰書此言于
其端爾道彥仙臺之產
舍號金令儁居于江戶
以其技鳴于世云

鵬齋老人識

とく高きよひくさふ州も本も己らちかか
深かしてあやうけれも一度も根よりして一筋を
川よせせし是も蔓も葉も枝もあきうけく
ワレ付らんは是の集は標題して呼ぶむ草
のもの漸きあひの

一 仇家社と白集を奇ふあくの集首と白くそ
家の風吹流人を悲しむうけつき家の子
傳へる門人等此後をいさそそむれ又別
一家首名利を助る田地持産も自らあま作を
あふ福者の系をきく悦んんハ芽出たをを
くそ云へりれ化しそそむも成る人耳はあま
す何るをを思ふ屋をて身うけうけ撰て定めて何
某の白集をうけ習て時久くそ人の目の翳をうき

すの業ありくくや世の世を恥りくれとて一期の
歌も焼すてく人の心乃法くふすゆとてつを
さて世の社裏は筆もあま此護物と云は乃あて
の志れ者くくくの正徹は体かうんあまの草
根集をやんまは先くけんあまあまを由の
早稲は晩稻は拾ひ集めあつめは年々後ふく
ようあま扱してそも持るをゆくくくくくの中
此料は斗らせられれあまの冬あまきかう羊途
あまかがる目よ登かかうくくくくくくくくくく
そまきさくくくく心地をそくくくくく

一 前よ云々字もあま等動もすれあお違して集集よ
出さきくくくくを改め正さ人の思を企つて
いつの昔のあまくくくくくくくくくくくくくく

常の題詠とまゝに我は申す所の儘を憊さるる言は
そくはくろくを載てあつたを厭ふんそく日其席の
澄よとて自化の作を明あつらん言ふ人其を能く
歩さんんん人化の家集よりくく類らんとく
く事あつた

葛のものと春之部

改正

才麗くあつた文あれや玉の春
さほ嬌やき柄のけいけい 絶ふれと

元日白家二日は類す

是買んらんを箱の舞のまを
斧の柄も朽んぬちすまつ曆

新ふしや 雲をほくく 青雲ふ

梅のすまの初懐身は弱筆
玉人等の一字をふて録は抄り付

大和ふり 玉のたるも 申しは

うき神の紋もあくまよやよ観

そり 春は葉もも来ぬやおもる

豆 相ふもてもまゝや 四十一雀

よしーくの馬寄り一羊は花の
通夜中より旅の真かある家

あつたるうちや 晴る日香る
とまへしりやきりくくしり

品文化三年 結帯いり
おまひり

初より 結帯も 結糸 白の馬鹿

正月とまふ 足袋をくく 夜ふ

梅翁の 塚より 春あはる

相もや 小はしめ 家のとれ 来る

万葉や はしめ 家のとれ 来る

茶葉や茶ふてささる茶韻

豆畑のあとも免の子日の如

七種

わの葉の夜は寒くも更けり

橋をくわくあもりよはる葉の

宗川もあもりよはる葉の

讚東星寄白鹿之圖

岬雅曰鹿乃仙獸性能自樂
角下必懷瑞蓋有蒼有白
有玄皆于歲之後而所變
之文也壽星豈不愛乎

夫の梅具より後を中より

春風

さる、あや日陰の芥もあはる

春風もあはるや京右良

よき人のよき中を似し春の令

春の日や春菜播てもあそびる

ちりちりと松もおりや春の夢も

山の原ものしくさうへ 揖 枕

霞

月雪のふり霞の影を帯

小池も汀をふりて霞の心

千鳥の風をいそぎ 寝るさう

和歌でも志をも比ぶる月霞の

鶯 雀

うそかんと

雀のうらみは中をなま

黄きのはらうまは小敷うま

雪の裏きさそや 中をくめ

うそ鳴るや木くられ物も梅の窟
ぬき藤の山鳥日取し 琴の鳴
山陰もさくさくあけをふくき雀
ひさきき音ぬきともさくさく
春の人よ野のまをさくさく

猫意

よの原根の直りさしを孫よの時

このはらつとも波をん ねと猫
山印の川あまこの猫のまるるりよ
さ傷く孫ころころも春のくさくれぬ

白真

ふ代倉も半そふさうぬを真の
きくいさな歌よこころの内儀
白真のぬすさくんとまのもえ

白いさみのあまのふとく梅さくら
梅のちね花さよ梅をさきさけ

梅

山寺の梅さくらさくらさくら
ととせえぬあたらむすし梅花
骨の梅梅の葉も白く梅
梅元、梅も咲くさくらさくら

せりきりおののくやう

らうと梅さくら梅さくらさくら
子あつるさくらさくらさくら
さくらさくら梅さくらさくら
梅さくらさくら梅さくらさくら
さくらさくら梅さくらさくら
梅さくらさくら梅さくらさくら

梅屋敷

さす傘の江戸を梅尺も解ゆる

凍るよ小鳥の糞もくめの尻

久しふくえて並ぶる梅つゝ

椿

一を数の花を持る椿うさ

庭の椿果乾や事ごとくぬが

信らるる古くあはれやうは椿

とかこしく人目とあはれ椿うさ

柳

とくふて昔はるる春のやうな

昔家世のるる柳つゝを花は椿

みらぬのくは又柳を権のさ人さ

年々度いつれもさうして左の志

ものや右をひくはうつれはあ

ふしむかてこの事を見よ結くはあ
むしむかてこの事を見よ結くはあ

史林赤く白のさねる 華下

田中下崎 華赤さねる 草下

さつふや 華赤さねる 史下

あふ子の 華赤さねる 史下

赤さねる 華赤さねる 史下

夕くけや 華赤さねる 史下

はくし 華赤さねる 史下

如月

さけしむ 華赤さねる 史下

ふしむか 華赤さねる 史下

如月や 華赤さねる 史下

史林赤く 華赤さねる 史下

孔子盗跖一塵埃君のこゝ

くちやうくちやひを

春の月あふ年々も 時流す
ういへて娘美心も花の月
業平の一期はいつと事の日
あけおふとあてまつる事の日

かこみも人けきうふ山を焼

飾 禁やうまをぬるふかく物
とちうも田中の神やうけと禁
けきう 物のまへは 春 寒く
空をぬき 空をうてあるや岨の鳩
春の氷まゝ 小くち子えゆる也
空をう 峰を流すのを流のる
しらぬぬ勢そのまをちる事の日

半しれふめて白うし融人春の百
春るの漏家もふちう梅う傍
と新の案いつの露をばと香る
便新もいひまうふちや半納め

風中

半しすえぬ元とていふし南吹
切命を業まてまふりもと驚筑

山居

はよりれは志し里の命うま侍

紅梅

紅梅をまはは佛よ手折るは
紅梅やまのちまは日のうけ
紅梅やあまはうれして後と夜

菜の花や蒿のむや小きゆく
きんあや滝うらうの里の幸
蒲の葉や菜のり標の乃次子

相せ足利よりるは

けくもくも胡葱浩へよ山日和
摺印もく軒のひまふや舟子くち
能くとも御うつく口う菜ちる

おら比子も死女まは休をとる屋暎
三葉あてらきふかうはけしあぶ

雛子

草先や小家のうけもあうのあう
酒をくは楠もあや帯雛子の巻
雛子あや人を身をたれ舟の巻
福この子に雛あよあまじ戸口よ

帰雁

戻り来りや打つ舟の聲も帰るとそ
ゆくとよかさしめたる扇の音
門田く立しうやそゆく雁の

か多田うしゆん恒根よあぬら
案う家の積恒小きうきさう橋

春のきくし船業もらふ尺ゆ伝也

深きものいしけあうや 雁の子

牛巴穴ハ懐の横肉布巾を去
る尺尺かき林泉とこしあう
みしうしゆん 代山の勢ひを
かさしじ

角屋の扉もそしれあもそ

蝶

かろししとこあれうあやまの蝶

子守歌に於ていやはしの後
よひ事るごのあけし 花こそよ

性

嫁ぐれし家さうまひそかく性
うす大れとかくい書はく性うさ
そあしを性あれあさつ性
是もよの余さうまおけぬ性性

雛

よくんまを坊う書おと 雛 買

邊是り結きころ

芽あきり 雛のむしよへをうれり
糸をはく 陸もあるを 雛の宿

あつくめを梅あきりうさ

永たりや足の弱さよあそひあぐ
手未伐と才たへ運出日比うか
肉ふりつけてあふあけあぐぬ
一蕙のさつた望よ
出のもーや親のはあやる芳野り

花

ちつさのちるは人よんれら
泣くものも馬ふらそ 花の山

花の寺入 花の寺入
花の寺入 花の寺入

霍芝集中西吟の時之士朗とさす
の坐をうえこ出き 悟悟の句

るあそひあぐぬ
花の寺入 花の寺入

いつさああはきーさや花の寺
花の寺入 花の寺入

花をよみんす古くは親もよみえゆそ
鷹の眼もくらとけつん雲の空

寛永寺 五白

市朝多代の花をよみし一夢は
院くしの若る夏もぬるさく好し
大八丁茶押んあも 花のうき

東叡法王の法外あふさふとて

花七日のゆめさふさふあれけり

花の上ある月夜も静かぬやい風
夜よ風さうしつさる後物そりつ

くみあきや丸品よあつ暮の花
傘はしる講もさうり雲の山
唯 穢のちう中あれや花七日
曙や花のふさけの人をまは
花のうき せう小娘うあふもふく

勸進能あると

ちよふくもくけくもや能と食

あはれ色後ひあつた家へ

宗 貞うきうい友もあま花見

上野う信後界り花を

花をもつて侍禮中さん 葉抄を

臥座し孫 眞かや花を二重裁

花よんごるんのかや 聖志く

木母寺

口もく土堤より出り 土堤の花

酒折けり 移立かひあり 芳
さて人しの 離蓮

ちよ花をうきおんをうきう小風台を

花果を掛けり 樹の葉をさす

様

あゝとくわさるるはくさくさ川
ゆきくさくさ様もてくる月夜や
不受不絶のゆきも花は清くさ

玉川よ庵を主とせしは

あもくさくさの斜もあさるるは清く

梳

梳の花扇斗屋はくさくさくさ

酒はくさくさ庵太りはくさくさ梳一を梳をくさ
梳ふくさくさ梳をくさくさくさ

五梳もくさくさくさくさくさくさ

ゆきくさくさくさくさくさくさ

ゆきくさくさくさくさくさくさ

ちくさくさくさくさくさくさ

子くさくさくさくさくさくさ

本は...も...
あ...
山...
山...
山...

山吹

山...
山...
山...
山...
山...

萱

了...
世...
あ...
あ...
あ...
あ...
あ...

北より至るをよせり 扱葉くさ

山人や新よすく 木實植る

おはまの極量よ又まはやある魚よ
侍よよは年ふふもあちちとく

夏よりきき方志よりまきく 草の種

北より池くれくくはき 春のくも

足利より登りけ世越るは

ふのま代の松よりれり 草のくも

り春

ゆく春や皆戸門ぬき 麦のふ

春色より春や 竹おす山の空

夏よりきき方志の白糸 羊

いづは、世の塵のやうにうらやまはすむ
申の家うらやまのやうにうらやまはすむ
よみうらやまのやうにうらやまはすむ
出て十時よきうらやまの黄昏ありけり

焼くうらやまの地をうらやま

文化三年うらやまの友人よりのうらやま
あつて明日に帰馬はうらやまのうらやまの
わくうらやまのうらやまのうらやまのうらやま
ともうらやまのうらやまのうらやまのうらやま
うらやまのうらやまのうらやまのうらやま
よーうらやまのうらやまのうらやまのうらやま
うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

六奇仙讚

黒主

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

業平

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

遍昭

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

小町

うらやまのうらやまのうらやまのうらやま

康秀

春芽子く林く史をくく庵く

喜撰

比さ勢の脊よものきさく一字三返は業

鶏旦より人日までを云はゆき来て

と海を白土種と申してこの十は唐よ

あつておれよきものともおれよき

家孝

一と勢のえりやう世さしを家く

二日も程よは言ん幣く懐くら

勢雪よりよも世さく三日可南

ふく糖くうけもんを勢や四日月

ねもろや五りくあつぬをうはる

そちのれを勢も後へ六日年

さく眞よんを勢もすく業く家

景くし又都く川六浦の麦甚くむ

金澤よとくくと宿野人よハな始も
四重亭も知えんうらなうら

おつやうを 麻の下や 四重亭

三時のおくまれりうらうらハ應安二年と
まらせり積ありこハこの地のうらふて
おとーまらんぬ其のものこくき彼
松下傍く新中て尺知ぬ祝の仇を
まらりけきうらうらこくくうらうら
下僅の兼味と申はく入る屋のうらや
麻板交いやうらうらうらくはことま
をくぬらう

馬ノ壺うらういさ出ーめんかーとまら

おはきおれた歩けをねら歩のまらういさ
うらう 魚籠のかまらうらうら

おまらゆもやうらうらおまらうらうら

袖の花よそまらうらうらまらて 郭ノ

まらうらやわのくくくくく 杜 翁

深川も 汐先もや 子 規

此世のくくくくくくくくくくくくくくく
皆くくくくくくくくくくくくくくく

その邊におきつゝ一に鬼の川志あり
つゝらよまゝの形をそねに連珠と
とせしむる風の百八段をくつゝの世
けある形とあてらるゝおのけの白草
あて神よは進家くつゝのたまゝとや
とせしむる人の心をねのたまゝと
神よけしむるよりむとひあつゝか
んかえまゝとせしむるたれと

賢くつゝの小舟くつゝさや 休き

小石川小日向くつゝの志系

くつゝ殿て 劍きくつゝくつゝ 杜宇

江上数拳音くつゝの神内

蜀 兔啼くつゝ 江上 数 拳 音

海 峯くつゝの 郭くつゝ

草付の温泉さきあり侍り

あはきくつゝくつゝや 根の子 規

閑古鳥

くつゝくつゝ 飛あつゝくつゝ つかんくつゝ

東古多節や終日進付く
歩出りし生れりやうも 東古多
ふりしつゝの 暖りのあつしあらん古多
閑古多 吟や 漕ぎ 船 一 考

嘗も老男はそくく 梅田 拙紀
苗唄よ 年よ 走れりや 新く子

沙 先やいしきと 強くいふる 東風

古松故双鳥且秋風を先を運りて
三つと四人皆頼りてふりたるをり 杖書
を海に定む口をさるるく 面をか
りれは是れをいふは 杖書 杖書
おのゝあつ家のいふは 杖書 杖書
あつし 昔之例の筆をさるるく 杖書
か 童曰 破く 袖をさるる人の
尺をさるるく 杖書

了 中の子 杖書 杖書 杖書 杖書

本房の 杖書 杖書の 杖書を 杖書を 杖書を
杖書を 杖書を 杖書を 杖書を 杖書を

うはゆりの花をん料よふる好定
出さめー暇をんを色ハ吟ひり
小庭や盛と〜〜 故の逢ひ
胡麻と一苗て〜作りをま〜つ 舞
江戸橋を〜らぬ〜りよ 松魚と
點 提を〜家の昔さや 朝の〜ち

み〜く夜や大野の葦原 春もをん
園庭も〜と出さハ〜〜 かつの月
かつ山や 江戸の〜花 夏や 門
五山や 雪は〜〜 遠方くら

一休も 毒の〜は〜〜 牡丹糸

花

ちり夜ハちるかよや牡丹

牡丹の名ありけりかき入る中
其名の所ありけり

くちり帯し襟し似し 京近

芍薬や黄玉懸け 日くけ家

片く百合花窓のそ記す 伏家

百合花しりしそ記す 鳴あし

信くちりしはあき也 雀うね

唐多の白ひ乃すく 罌粟の花

負走も 仕保をてんよ 夜の花

杜若

手く折るいし 籠れあうまつ

この花をるうまけしや 花子花

箕敷も 花子花

高福や 人も花子花

さくらさや火を焚く家のうまつるこ

庭よりしり卯をくまや田一牧

急如し是を卯花好むむくく

小百村の古書の温泉寺の雪をさけんとて
くまを信じて四月八日を時とて又山へさる

卯花よめく戸も水く小百村

葉はくくや世まじり人の出あはく日

法親王の口薬地あるく

く概くれの田菓子屋系新とろ

曲くろの早草くもる方くろ概

仙臺侯の号くはあまらり龍室
寺くゆりま久庫を志そんくは新
をくくろもものくくはうよんせとてん
きくく

柳くくくやセウかおりのきあよん

木も夢まありく歳くや壁の尻

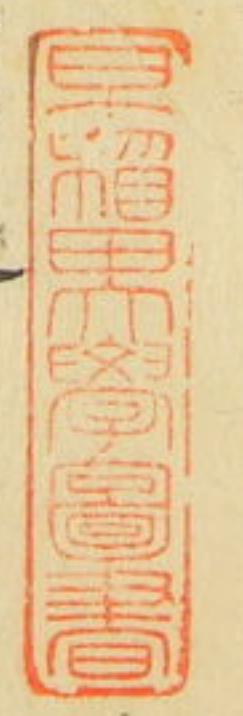
あつたを 藤の葉と人 なる色は
とて何葉のふもか 人なる 花は
けき木のあめはさう 歩草は
草や妙愛の神巫う 少風台
子やうそ中も 持はや 中り親

昔はもて 葛藤をやり 勢峰の
都急や 白苗 持とも あや 先子

所思

うそひるや 赤も 太刀を 飾らぬ
梅も 若く 草刈り 煙 ひとし 燦
五月も 花を めくく 花 市 為

きつさる首の小橋を 影はゆく
五月雨は水も切し 小寺うか
けしれや金魚飽き 蝶は漏
五月るまけの守敏の 靴あきん
まろくもや志と狐 どのもくくの家
さきまもまも 漢のあつ 男のつ 厚草
まろくもや志と狐 どのもくくの家



九朴坊様は大雨の割をきかれ
てこそろあ人もくく
壺羊山は日くくをうくあし
あてくく

之市白きよみ けやあきまのまき 嵐
合頼さくや世あうけさる 豆腐茶屋
富士川の合頼まうけさる 家始さ
新小橋や去年のうけさる 一因忌

世に傳はるる友を成るる山に所

下宮や 時のあるく小草も亦

何中能懐くつゝも亦下や

鹿頼法師の宝物集との終り

の記ころ

世に伝はるる友を成るる山に所

下宮や 時のあるく小草も亦

何中能懐くつゝも亦下や

門出の川出巻ハ巻川 苗々々々

早乙女よ 夜色の吐もるぬ海

植し泥もすまぬよ 葉や 葉葉と

とや 枝と去りし 田一牧

水鶏 菊

中央部 菊 菊 菊 菊 菊

さへ傳はるる友を成るる山に所

あはれなりや果てしむの奉加証
馬麻糸はのたうあまややまの峰
雲の峯大なる眉こゝ入る侍
蘇れの中をゆくや雲の峯
夕立の侍の宿をこゝへ
海濱やまのあまも湧き出

水甚法多れハ魚住候とけあつて
人絶てやまれハ岡をさし

すーさや下野も赤中も二人あ
舟すー釣をも思ふ草も

江島

不そく程も時やそくは海濱
官守の歌回るもすくけき
馬あつやま麻糸もハツ下

乙姫の床よりさへききむじり
着掛くつらきとてさへ床へ
との友も惟ふすくく四十めく
玉を結 園とあるは 行・哉
病 起る 園とあるは 先上げ
抱子園とあるは 園の 幸 録
そとあり 夕の 余 思
る 杯や 扇とあり 馬の 面

暁

大日乃 抱子もあはく 暁の 夢
怪くあはく 出やとあり くらく
瀧うけきき 中とあり 暁の 夢

蓮

新 新屋の一の 人 蓮の 花
乃 朗 中とあり 蓮 白ふ

浮蓮より魚をくんとくちりける

色くはな及とさるのん候

蓮池より満よりとくちりける

梅子

蓮生やあはれとくちりける

半より日はあはれとくちりける

梅子よりよきとくちりける

魚や戸を焚くあはれとくちりける

蓮の影や鞠子の汁もあはれとくちりける

蓮のうきく来るやあはれとくちりける

蓮もあはれとくちりける

心よ思ひりける

直りぬる麻の葉はあはれとくちりける

山の遠き夏もやとめぬ寝しうら
漏れぬるふもなほ寝し一葉の香
小灯さしけあるや中夜夢の香
風ささく口や幸ふとふ寝さむ
脊の寝自さる家と所を袖の古産
床さるや梅子初る一葉の香

比々夜酒とも筆のさし川時

市伎

市後の夜七夕姫も揺りてはるの
後後してはるはくまの葉とて
出直りや書あまを運ては後川

随ふ箱のしつゝききれ——小始のそこの
形——く——日教魚もなる後深きなる
床几よ——はつと——は

昔の合致そのまゝとて——枝やとも

ワ——人のまをまよひききるとして伯父
ありける人の許より宣旨のあき
路の任意承へん終へて清女は
の草束を運びこまればなりと老なる
まよひの志を——余はのもはあつてらん
地——く——只——く——の世のの——あ

ほつゝるやの習を——誰か——ん——の——

懐のふ動三郎の存あり——中村歌麿つゝ
士返をもんまかひらつて士人連あつても
——と梅妻の情味をひ出し——の——
誰か——の——つゝ——の——
ぬきておのれは——は

扱の巾よ 泣 鬼 足きつ 眼 能 光 玉

大蔵の虎十九のくち髪を——
くけり院や——と——の——
扇や——の——
鞍の上よ——の——
うき——の——

扇 玉を——かきすり 扇り 寺

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page. The words are difficult to decipher due to the cursive style and fading. The text appears to be organized into several lines, possibly representing a list or a series of entries. The overall appearance is that of an old, handwritten manuscript.

